

基 点 地域紛争と湾岸戦争への私見

東京外国語大学 教授 中嶋嶺雄

ハイテク兵器を思う存分に使った多国籍軍の緒戦における圧倒的勝利と思われた対イラク湾岸戦争は、やはりアメリカ側の重大かつ深刻な誤算になりはしないか。

一月二八日正午（日本時間）の多国籍軍司令部による戦況報告では、これまで延べ二一、〇〇〇機の攻撃でイラクの戦略拠点および艦艇一八隻を撃沈したというが、その費用対効果は、あまりにも高いといわねばならない。こうした状況のなかで多国籍軍側は、近日中の地上戦争開始を予定しているというが、そうなれば、ベトナム戦争のように、さらにアメリカ側の誤算が累積されるかもしれない。なぜなら、砂漠での地上戦は、戦略・戦術上も時間的・空間的情况も、ベトナムのジャングル同様、いわゆる非対称的地域紛争（Asymmetrical Regional Conflict）の典型だと思われるからである。

そもそも、今回のアメリカ軍の対イラク戦争は、それがいかにハイテク精密兵器による圧倒的拠点空爆であっても、基本的には米ソ冷戦時代に対ソ戦略として開発された兵器体系によるものであり、戦争に備えて地下にもぐったイラクの布陣には必ずしも有効性をもたないように思われる。

それにしても、時々刻々、戦争が拡大している現時点で、この戦争の根源について疑義を呈することなど、無意味かつ不必要に思われるかもしれないが、戦争の悲劇がしばしば周到な計画を狂わせる誤算の累積によることを想うとき、私は、今回の湾岸戦争への素朴な、かつ深い疑問を語らずにはいられない。

侵略は国際法上も許されない暴挙であったが、そのような牙をむき出していたサダム・フセインの野望を容易に許してしまったクウェートに、そもそも問題があったのではないか。

湾岸地域ではサウジアラビアに次ぐ石油埋蔵量をもつクウェートは、その「石油王国」に安住して、軍事的にも、外交的にも、イラクの侵略を防ぐ努力を怠ってきたからこそ、このような暴挙を許してしまったのである。なぜクウェートは、アメリカや西側諸国と事前に安全保障体制を組むなり、アラブ諸国の独裁者はこれまでも次々に潰えたのだから、外交上は一時的にせよ対イラク柔軟対応戦略ないしは面従腹背の外交政策を講ずるなりして、真剣に自己防衛をはからなかったのか。

いずれにせよ、クウェートの紛争は、石油問題・領土問題を含めて、基本的にアラブ内部の地域紛争であり、ある意味ではオスマン・トルコ帝国崩壊以降のアラブ問題の決着の無理から派生した歴史的な地域紛争だったはずである。

だとすれば、いかに国連決議があったにせよ、イランのホメイニ革命で手を焼いたアメリカがイラン・イラク戦争ではイラク側の軍備強化に肩入れしてきたのに、今度は飼犬に手をかまれたことに猛反撥したという構図がそこに浮かびあがってくる。地域紛争を国際的戦争へと転化し、自らの防衛努力を怠ってきた、全世界を巻き込んで守るに値するか否かの疑わしい人口二〇〇万足らずのクウェートに与して、多国籍軍が今回のような全面攻撃に出たのは、いかにアメリカ的正義や新しい世界秩序のためとはいえ、やはり問題が残ると言わざるを得ない。

LTCBR

LTCB Institute of Research and Consulting, Inc.

平成元年11月11日第三種郵便物認可
平成3年2月10日発行(毎月1回10日発行)

長銀総研

エル

1991 Vol.-85

2

長銀総合研究所